

今回の在外研究による連合王国入国は、当初予定されていた EU 離脱の直前であったことから、新聞社からの依頼もあり、月に一度の計七回の現地からのレポートを連載している。以下に、その見出しを記しておく。

第一回(2019年04月18日): 合意案3度否決; 国民にうんざりムード

第二回(2019年05月03日): 分断する国民と国家; 同じ党内でも収集つかず

第三回(2019年06月03日): スコットランドは残留支持; 迫る連合王国瓦解の危機

第四回(2019年07月03日): メイ首相辞任スピーチ; 民意尊重が民主主義の礎

第五回(2019年08月04日): いまだに残る階級間格差; 言葉や愛読紙でも露見

第六回(2019年09月06日): ジョンソン首相への懸念; 連合王国の将来に暗雲

第七回(2019年10月17日): 難局必ず乗り越える; 戦争の惨禍を忘れぬ国

所属先のケンブリッジ大学では、University Library でイギリス社会、とりわけ18世紀後半からヴィクトリア朝以降の社会と文化を中心に研究を深めた。世界中からの一流の研究者との交流と意見交換も有意義であった。とりわけ、著名なUCDのProf. Brian O'Connor (哲学専攻)と巡り会えたことは、分野が違うとはいえ、大きな成果の一つと言えるであろう。

もう一つの所属先であるロンドン大学のInstitute of Historical Researchでは、Senate Houseの中にあるライブラリーで、16世紀以降のロンドンの歴史を中心に再研究をしている。この歴史研究には、Museum of London や Victoria & Albert Museum なども大きな役割を果たしている。後者は、Queen Victoria とドイツ出身の夫君 Albert 公にちなんで1852年(第一回万国博覧会の翌年)に開館したが、産業革命に関わる数多くの収蔵品がある。ちなみに、2019年はQueen Victoria 生誕200周年で、特別企画の展示もあった。

そのほか、National Army Museum や Imperial War Museum などは、世界の恒久平和を考える上で有用な博物館であり、第一次世界大戦終結以降の Remembrance Sunday と Poppy Appeal を考察する上で重要であろう。

また、8月下旬にはケンブリッジ郊外のご自宅で Professor Emeritus の John Bertrand Gurdon (2012年ノーベル医学生理学賞受賞者；山中伸弥が共同受賞)とも知己を得たことは幸いであった。

なお、研究成果の詳細については、いつも通りに、複数の著作で公開して行く事になる。